

文学教材の研究

―宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の言語表現―

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘二―一（〒八〇七―八五八六）

（二〇一四年一月一三日受付、二〇一四年二月一八日受理）

はじめに

国際化社会への参入と情報化社会への適応から、昨今の国語科教育においては、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」が優先されている。しかし、国際化社会および情報化社会においてさまざまな伝達の基本となる言語を習得するには「読むこと」が大切であり、ここに文学教材の力が必要とされる理由がある。

本論では、小学校・中学校・高等学校の文学教材として取り上げられることが多い宮沢賢治の作品について考察する。賢治は、多種多様な仕事を遺したが、時間の経過とともにそのひとつひとつが輝きを増し、多彩な魅力を放っている。賢治が書いた詩や童話に限って言えば、賢治の造語である「心象スケッチ」は作品を読んだ人々の心のなかに新たな風景を描き出していく。河合隼雄は、空にある星座を意味する「コンステーション」という言葉を提示して京都大学での最終講義を行った¹。

日本語のしこりという言葉はまさにコンプレックスですね。

ところが、そのしこりのもっと深くに一つのもとなるようなタイプを考えていいんじゃないか。（中略）人間の心の深いところには、そういう元型のようなものがあつて、そのあらわれがいろんなところに出てきているという見方で、ユングは人間の心の現象を見ようとしました。

河合隼雄は、ユング研究所でC・A・マイヤーの「自己実現の過程をコンストレイトする」という言葉に衝撃をうけ、心理療法としてコンストレーションについて考えるようになったという。賢治は自分の作品を「心象スケッチ」とよび、自分の心の現象を言葉で表現した。河合隼雄が「人間の心というもの、このコンストレーションを表現するときに物語ろうとする傾向を持っている」というように、賢治が物語るコンストレーションとしての宇宙空間を描いた『銀河鉄道の夜』を文学教材として取り上げる。賢治の作品は、戦後の日本のすぐれた文学教材として現在も生

き続けている。須貝千里氏は、「読み」とは対象を〈わたしのなかの他者〉にしていく過程であるが、同時に、それは〈ことばの仕組み〉を掘り起こしていくことによって〈わたしのなかの他者〉としての作品像を問い直し、倒壊させていく動的課程でもある³。と指摘し、文学教材における「読むこと」の重要性を提起している。賢治の『銀河鉄道の夜』を文学教材として取りあげ、「読むこと」を中心とした表現分析を実施する。

一、宮沢賢治と国語教科書

宮沢賢治の童話がはじめて国語教科書に収載されたのは、一九四六年一月から一九四七年三月まで使用された『初等科国語』四年の「どんぐりと山ねこ」である⁴。『注文の多い料理店』刊行から二三年、賢治の死後一三年たった戦後すぐの収載である。その後「どんぐりと山ねこ」は繰り返し国語教科書に登場するようになった。昭和時代には、『どんぐりと山ねこ』のほかに、「気のいい火山弾」「よだかの星」「オツベルと象」(大正一五年一月『月曜』発行時は「オツベルと象」だったものが昭和九年最初の文圃堂版全集では「オツベルと象」で掲載され、その後四〇年間教科書掲載時も「オツベルと象」として収載、初出誌『月曜』一月号が発見され、昭和四九年刊行された『校本全集第十一巻』には「オツベルと象」と題して掲載されるが、ただ『月曜』本文は拗促音に

小文字を使用していないので発音は「オツベル」なのか「オツベル」なのかは依然不明である。現在は「オツベルと象」として収載⁵「祭りの晩」「けんじゅう公園林」「セロひきのゴーシュ」「風の又三郎」「やまなし」「グスコブドリの伝記」「雪わたり」「おいの森とざる森、ぬすと森」「注文の多い料理店」が収載された。平成時代には、ほぼ賢治作品の文学教材は定番化し、小学校五年では「注文の多い料理店」「雪わたり」「おいの森とざる森、ぬすと森」が収載され、六年では「やまなし」が収載された。賢治作品が国語教科書の文学教材として定番化されてきたことについて、牛山恵氏は「少なくとも賢治童話には、子どもにとって文学の読みのおもしろさを体験させ、言語力としての文学的な基礎素養を高めていく上で教材価値が見出されてきたことは間違いないことだろう」と指摘している⁶。

本論では、『銀河鉄道の夜』の言語表現について論究する。『銀河鉄道の夜』は賢治の作品のなかでは、童話というよりも少年小説として読まれている。村瀬学氏が『銀河鉄道の夜』という作品は、まさに「信じる」と「知る」ことが分かれはじめる少年たちが体験してゆく、特異な時期の世界体験を作品化しようとしているものになっていた⁷と述べるように、子どもたちの成長を描いた文学作品である。言語表現の難しさは賢治作品にはつきものではあるが、この作品のもつ宇宙感覚が、教室での言語理解を超えたもので生成されていることが、教材として取り扱ううえ

での困難さを匂わせている。さらに、授業者に教材としての不安をもたらすのはテキストの不安定さであり、そこを克服すれば文学教材としての魅力を掻き立てるものになる。まずは、賢治自身の『銀河鉄道の夜』に施したおびただしい推敲のあとをたどり、作品推移について考察する。

二、『銀河鉄道の夜』の推移

『銀河鉄道の夜』の現存稿は八三枚である。原稿執筆は大きく四段階に分けられ、執筆時期は大正一三年（一九二四）から死の直前までにおよぶという。その間、何度か部分的に紙が差し替えられたり破棄されたり、新しい紙が加えられたりした。第一、第二次稿は一部残るのみで、第三次稿は大正末年には成立していたとみられる。第四次稿は昭和六年（一九三一）頃黒インクで手を入れられたものである。賢治が亡くなった翌年、昭和九年（一九三四）一〇月、文圖堂版『宮沢賢治全集』第三巻童話編（高村光太郎・宮沢清六・草野心平・横光利一編集）が刊行され、昭和一四年（一九三九）十一月、十字屋書店版『宮沢賢治全集』全六巻別巻一（高村光太郎・中島健蔵・宮沢清六・森荘巳池・藤原嘉藤治・草野心平・谷川徹三・横光利一編集）が刊行開始される。昭和三十一年（一九五六）四月、第一次筑摩書房版『宮沢賢治全集』全一一巻が刊行開始される。昭和四二年（一九六七）八月、書簡集を加えた増補

改訂版、第二次筑摩書房版『宮沢賢治全集』全一二巻が刊行される。そして、没後四〇年たった昭和四八年（一九七三）五月、作品の推敲状況を復元、新編集によって大きな変更を加えた筑摩書房版『校本宮沢賢治全集』全一四巻が刊行開始される（昭和五二年一〇月完結）。これによって宮沢賢治の文学の全貌が姿を現したことになる。校本全集以前のテキストには初期形（第一次稿・第二次稿・第三次稿）と最終形（第四次稿）の混同がみられ、最終形にも推敲の際の消し忘れと見られる箇所などがあり、「永久の未完成これ完成である」（『農民芸術概論綱要』）という賢治の言葉どおり、賢治の遺した原稿に定稿はなく、初期形・最終形はともに同名の別の作品として考えることができ、『銀河鉄道の夜』は賢治が亡くなったことで「未定稿」であるといえる。

『銀河鉄道の夜』校訂についての複雑さは、森荘巳池、宮沢伸六とともに『銀河鉄道の夜』本文に再検討を加えようとする堀尾青史の『銀河鉄道の夜』の新校訂」と題された文によく表されている。

さてわたしたちは、丸善製四百字原稿用紙、かきつぶし原稿紙のうら、西洋半紙、生ずき半紙などに、きちょうめんなペン字、何種類かのえんぴつの字、ブルーブラックインクで闊達に書かれた字などうずめられた、実にめんどろな原稿と対決した。それは混乱がおこらないのがふしぎと思えるほど、たいへんな原稿である。原稿用紙のマスの中にきちんと

入っているのは、最初に書かれたものらしく、えんぴつ書きのものはかまわず書きちらされた上、消され、横に書きたされ、上に下にあき地があればこそ幸いとばかりこまかく書きたされ、それが無塵にとんでいる。それを三人は全集本（筑摩三一年版）岩波文庫相手に声をあげて一字一句たしかめていった。（『図書新聞』一九六四年（昭和三九）一〇月三日号）

ここからは、賢治の死後、実弟宮沢清六や友人森荘已池や沢山の研究者が加わって『銀河鉄道の夜』草稿の校訂に取り組んだ現場の混乱と熱意が伝わってくる。それほど、『銀河鉄道の夜』のテキストには厄介さと複雑さが付きまとうのである。

初期形第三次稿から最終形への変更でもっとも重要なのは、「セロの声」「黒い大きな帽子の大人」「ブルカニロ博士」の科白が最終形で削除されたことと、冒頭の「午後の授業」「活版所」「家」が最終形で書き加えられたことである。千葉幹一氏は「超人的な力を使い、ジョバンニをたびたび窮地から救うブルカニロ博士がジョバンニについているということは、彼はそうした超越的存在の庇護をつねに受けられる特別な子どもということにもなります」と述べ、賢治は最終形でジョバンニを普通の子どもにするために超越者ブルカニロ博士を消去したのだと考察している。ジョバンニが自分の力で現実の悲しみを乗り越えていく姿を描くために観念的なものを捨てたのが最終形第四次稿での賢治の選択であったといえる。上田哲氏は、「同じ材料を使いながら、賢治

の心象の内奥のスケッチとしての〈ウル「銀河鉄道の夜」〉から、少年小説としての「銀河鉄道の夜」への変貌は、単なる推敲の域を越え、同名の別の作品の成立をもたらしつつあった」と指摘するが、初期形第一次稿・初期形第二次稿・初期形第三次稿に最終形を加えた四つの「銀河鉄道の夜」があると考えるのが適切である。研究者にとっては不安定なテキストではあるが、賢治の言葉に耳を傾けながら作品を読み解くことが大切であると考ええる。

『銀河鉄道の夜』の草稿と刊本が複雑であるのは、一九二四年（大正一三）の『注文の多い料理店』刊行後から書き始められ、一九三三年（昭和八）の死の間際まで九年間にわたって書き続けられたという時間の長さに起因する。書き上げては、何度も手入れされ、部分的清書が繰り返されるという『銀河鉄道の夜』に籠めた賢治の祈りの主題が、その原稿の複雑さと相まって読む者の心を打つ。初期形第一次稿・初期形第二次稿・初期形第三次稿および最終形の校訂にともなって全集収録に際しても、賢治の死後すぐに刊行された一九三四年（昭和九）一〇月文圃堂版全集第三巻から一九三九年（昭和一四）十一月十字屋書店版全集三巻、一九五六年（昭和三一）四月筑摩書房版全集第一〇巻、一九六七年（昭和四二）一〇月筑摩書房版全集一〇巻、一九七四年（昭和四九）三月筑摩書房版校本全集第一〇巻まで『銀河鉄道の夜』のテキストは変化し続けた。現在の筑摩書房版全集では、初期形一、初期形二、初期形三は『新校本 宮沢賢治全集第一〇巻』一九九五年

九月に、最新の研究成果である『銀河鉄道の夜』を『新校本 宮澤賢治全集第十一巻』一九九六年一月として刊行している。入沢康夫氏は『銀河鉄道の夜』現存稿紙面のあちこちに残っていて、おそらく文圃堂版全集の本文作りの際のものと考えられる、赤インクや色鉛筆を使って記入された文字や丸番号や繋ぎ具合を示す線や記号（いずれも非自筆）。¹⁰までも視野に入れたテキスト作成が現在進行中であることを述べている。皮肉にも、賢治の死去により未定稿になったことが、このテキストの語り尽くせぬ魅力を増幅させているのである。

文学教材の研究として、『銀河鉄道の夜』の言語表現について、初期形第三次稿では冒頭であった「ケンタウル祭」「天気輪の柱」「銀河ステーション」と最終形で書き加えられた冒頭の「午后の授業」「活版所」「家」の部分とに分けて考察する。

三、初期形第三次稿『銀河鉄道の夜』の言語表現

賢治の言語表現を明らかにすることは、作品の教材化と授業において重要である。文学教材の研究では、学習者の印象と作品構造との関係が重要であるが、学習者に作品そのものの構造を理解させるには言語表現の分析が重要な課題となる。本論では、『銀河鉄道の夜』のテキスト推移にみる賢治の制作意図をみるととも

に、作品の言語表現から主人公であるジョバンニのなかで何が変化していくかを考察する。

初期形第三次稿は、「ケンタウル祭の夜」と題して「そら、ぼくの影ぼうしは、だんだんみぢかくなって、ぼくへ追いついて来る。ぢきにすっかりちぢまっちまふぞ。」という独り言が始まる。

ジョバンニは、口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付きで、うしろをふりかへって、こんなことを考へながら、櫓のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立ってゐました。ほんたうにジョバンニが、どんな電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののやうに、長くぼんやり、うしろへ引いてゐたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまはつて来るのでした。

そして、「ぼくはまるで軽便鉄道の機関車だ。ここは勾配だらこんなに速い。ぼくはいまその電燈を通り越す。しゅっしゅっ。そら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまはって、前の方へ来た。」という独り言が続く。

とジョバンニが思ひながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなり一人の顔の赤い、新らしいえりの尖ったシャツを着た小さな子が、電燈の向ふ側の暗い小路から出て来て、ひらっとジョバンニとすれちがひました。

「ザネリ、どこへ行つたの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひました。

なぜならジョバンニのお父さんは、そんならつこや海豹をとる、それも密漁船に乗つてゐて、それになにかひとを怪我させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入つてゐるといふのでした。ですから今夜だつて、みんなが町の広場にあつまつて、一緒に星めぐりの歌をうたつたり、川へ青い鳥瓜のあかしを流したりする、たのしいケンタウル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のまま、病氣のおつかさんの牛乳の配られて来ないのをとり、下の町はづれまで行くのでした。

さらに「ザネリは、どうしてぼくがなんにもしないのに、あんなことを云ふのだらう。(中略) けれどもあんなことをいふのはばかなからだ。」と独り言を繰り返すのである。初期形第三次稿では、ジョバンニの独り言が多く、友達への関わり方に暗い影が潜んでいる。

ジョバンニは、せわしくこんなことを考へながら、さつききた町かどを、まがらうとしましたら、向ふのの雑貨店の前

で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい鳥瓜の燈火あかりを持ってやつて来るのを見ました。その笑ひ声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思はずどきつとして戻ろうとしましたが、思ひ直して、一そう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云はうとして、少しのどがつまつたやうに思つたとき、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さつきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になつて、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒さうに、だまつて少しわらつて、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐました。

ザネリに意地悪を言われて「ジョバンニは、遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへつて見ましたら、ザネリがやはりふりかへつて見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて行つてしまつたのです。ジョバンニは、

なんとも云へずさびしくなって、いきなり走り出しました」というのである。初期形第三次稿では、ジョバンニの境遇の悲惨さが強調されていて、ジョバンニのさびしさは家庭環境からくる学校での疎外感にあるように描かれている。そして、祭にもかかわらず、ジョバンニの心は暗く、「ぼくはどこへもあそびに行くところがない。ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ。」という独り言となってさびしさは極まるのである。

つづく「天気輪の柱」で、ひとりぼっちになったジョバンニは「頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げ」と、「町の灯は、暗やみの中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにともり、子供らの歌ふ声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来る」のである。

野原から汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果りんごを剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなって、また眼をそらに挙げました。

そこで「ぼくはもう、遠くへ行つてしまひたい。」という独り言を吐いてしますのである。

そして、「銀河ステーション」では、「セロのやうなごうごうした声がきこえて」くるのである。

するとこんどは、前からでもうしろからでもどこからでもな

いふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションときこえました。そしていよいよをかしいことは、その語が、少しもジョバンニの知らない語なのに、その意味はちゃんとわかるのでした。

「知らない語なのに、その意味はちゃんとわかる」ということは、この作品においては重要である。言葉の二重性ということが提起されているのだ。ここから、読者は知ることと信じていることの二重性に引き裂かれていくのである。そもそも「銀河」とは何かという問題が浮上する。ジョバンニが知識として知っている「銀河」と、これからジョバンニの視界に現前する「銀河」はあまりにもかけ離れているからである。

いきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の螢ほたるの火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたといふ工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫とれないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかへして、ばら撒まいたといふ風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジョバンニは、思はず何べんも眼を擦こすつてしまひました。

そして、「ふと気がついてみると、さつきから、ことごとごとごと、ジョバンニの乗つてゐる小さな列車が走りつづけてゐたのでした。ほんたうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座つてゐた」の

である。そして、「すぐ前の席に、ぬれたやうにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるやうな気がして、さう思ふと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出さうとしたとき、俄かにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見」たのが、「カムパネルラだった」のである。初期形第三次稿で「銀河鉄道」にジョバンニが乗り込むまでの言語表現には、言語の二重性という問題が提起されていたのである。そして、最終形では、「知ること」と「信じること」の言語表現の二重性が明らかになる。

四、最終形『銀河鉄道の夜』の言語表現

最終形では「一、午^ご後の授業」「二、活版所」「三、家」が新たに書き加えられた。まず、「午^ご後の授業」から考察する。

「ではみなさんは、さういうふう^にに川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いものがぼんたうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげ

ました。ジョバンニも手をあげやうとして、急いでそのまゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちでするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答へることができないのでした。ザネリが前の席からふりかへつて、ジョバンニを見てくすつとわらひました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまつ赤になつてしまひました。先生がまた云ひました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でせう。」

やっぱり星だとジョバンニは思ひましたがこんどもすぐに答へることができませんでした。

先生はしばらく困つたやうすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもちも立ち上つたまゝやはり答へができませんでした。

この冒頭の場面は重要である。初期形第三次稿で提示された言葉の二重性の問題が具体的に描きだされているからである。初期

形では、「銀河ステーション」という不思議な声に対して、「その語が、少しもジョバンニの知らない語なのに、その意味はちゃんとわかる」と書かれていたが、最終形では学校の教室で先生が「銀河」という言葉について質問するという設定が用意された。ジョバンニもカムパネルラも「銀河」という言葉の意味は知っているが、「銀河」そのものの実体はわからないというのだ。

先生は意外なやうにしばらくちつとカムパネルラを見てゐましたが、急いで「では。よし。」と云ひながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないゝ望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんさうでせう。」

ジョバンニはまっ赤になつてうなづきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。さうだ僕は知つてゐたのだ、勿論カムパネルラも知つてゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。

ここで問われているのは、知つてゐるということの内実の問題である。知識で知つてゐるということと自分の体験として知つてゐるということには大きな違いがある。これから「銀河」を体験する二人にとっては、簡単に知識として答えることができないのである。

先生はまた云ひました。

「ですからもしもこの天の川がほんたうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでゐる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云ひますと、それは真空といふ光をある速さで伝へるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでゐるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるやうに、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたがつて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入つた大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光つてゐる星だと考へます。私どもの太陽がこのぼゞ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄いのでわづかの光る粒即ち星し

か見えないのでせう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるといふこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるか「」その中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではこゝまでです。本やノートをおしまひ下さい。」

この「銀河」への導入が、『銀河鉄道の夜』という作品を童話から少年小説というジャンルに変貌させたといえる。初期形第三次稿の入口と出口を作り直すことによって、賢治はよりリアルな宇宙空間を創造することに成功している。初期形第三次稿が重点をおいていたジョバンニの悲劇性が薄くなったぶんだけ、「銀河」という宇宙空間の幻想性が濃厚になったということが出来る。

さらに、「一、活版所」で、ジョバンニの労働や日常生活が生き生きと描きだされることで、少年から青年へと成長するジョバンニのたくましさ強調されている。

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところに集まってゐました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらへて川へ流す烏瓜からすうりを取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門

を出て来ました。すると町「の」家々ではこんやの銀河の祭りにいちゐの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしてゐるのですした。

学校の友達は星祭だといつて遊びにいくのに、ジョバンニは労働しなければ生活が成り立たないという大人の世界に足を踏み入れている。いつまでも子どもではいられないジョバンニは「白服を着た人」から「小さな銀貨を一つ」もらつて、それでも子どもらしさもまだ残つていて、「俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだし」「それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買ひますと一目散に走りだし」たのである。ここには、ジョバンニのたくましい生命力が描きだされている。

さらに、「三、家」では、ジョバンニの家庭での役割が描かれ、作品の心臓部を描くための重要な鍵となる語が伏線として表現されている。カムパネルラの母とも比較される病気の母、ときどき手伝いにくる姉、そして監獄に入っていると噂される父が描かれる。

ジョバンニが勢よく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆ひが下りたまゝになつてゐました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの。」ジョバン

ニは靴をぬぎながら云ひました。

「あゝ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずっと工合がいゝよ。」

ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝込んでゐたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

また、その父とカムパネルラの父が自分たちのように友達であつたことが描かれる。

「あゝだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになつてゐたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすっかり煤すすけたよ。」

ここには、後半でカムパネルラと銀河の汽車に乗り合わせるといふ伏線がはられている。そして、「銀河」が「the Milky Way」と呼ばれることから「牛乳」は重要な言葉として掉尾でも登場する。

「さうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

さらに、ジョバンニの母としての注意が放たれる。後半でカムパネルラがザネリを助けようとして川にはいり、水死してしまうことの伏線が張られている。

「あゝ行つておいで。」川へははひらないでね。」

「あゝぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」(中略)

ジョバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云ひながら暗い戸口を出ました。

最後に、この一時間、一時間半にも不気味な伏線が張られていて、カムパネルラが川に入ることと死んで銀河鉄道に乗車していたのは父親が時計で測つた四五分であり、ジョバンニが家を出て、銀河鉄道に乗車して、牛乳をもらつて家に帰るまでの時間は一時間から一時間半ということになるのである。

このように、最終形で加えられた冒頭部「午後の授業」「活版所」「家」は、初期形第三次稿にはなかった「銀河」の宇宙空間を際立たせる伏線を綿密に描きわけていることがわかる。最終稿における加筆修正について、村瀬学氏は「単なるストーリーの手直しといったレベルのものではなく、銀河鉄道に乗るといふ設定そのものの意味づけを修正するものを含んでいた」と指摘する。『銀河鉄道の夜』のテクストの推移を言語表現を中心に分析することは、作品の避けられない主題を浮かび上がらせることに

繋がり、延いては賢治のかかえこんでいた問題意識の変遷や宇宙意志の深遠についても考察を深めることができる。国語科の文学教材として、賢治の宇宙空間を表象する言語表現に集中して読み込んでいくことが重要である。

おわりに

『銀河鉄道の夜』でジョバンニが乗り越えなければならない悲しみとは、親友カムパネルラとの死別である。「銀河」は古代の伝説でも死んだ人の亡魂があゝの世に行く道と見たものが多いという¹²。賢治は「銀河」に死の世界を重ねることで、「科学」と「宗教」の融合を描きだしている。大正十一年一月二十七日最愛の妹トシを喪った賢治は、翌大正十二年七月三十一日から八月一二日まで青森・北海道・樺太を旅している。トシの死の直後の日付のある「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の生々しい悲痛な叫びは、翌年の「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「噴火湾（ノクターン）」の痛切な絶唱となつて昇華する。

あいつはこんなさびしい停車場を／たつたひとりで通つていつたらうか／どこへ行くともわからないその方向を／どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを／たつたひとりでさびしくあるいて行つたらうか（中略）
かんがへださなければならぬことは／どうしてもかんがへ

ださなければならぬ／とし子はみんなが死ぬとなづける／そのやりかたを通つて行き／それからさきどこへ行つたかわからない／それはおれたちの空間の方向ではかられない／感ぜられない方向を感じやうとするときは／たれだつてみんなぐるぐるする（「青森挽歌」）

「無声慟哭」で死んでいく妹トシに「わたくしはそれをいまま言へないのだ」と死後の世界について語れなかった賢治は、小沢俊郎氏が「妹が行く世界が肯定できなくては賢治自身が納まらない。賢治自身、納得のゆく世界を描ければ愛する人を失った多くの人たちの心をも納得させることができる」¹³と述べるように肯定的死後の世界として『銀河鉄道の夜』を何度も書き続けたのである。また、河合隼雄氏が「人間の生を裏打ちする死、ということについて、しっかりと目が見ええられているのを感じさせる。死の側から生を見ることによって、正の輝きが全所に美しく感じられる」¹⁴と述べるように賢治は愛するトシの死、そして自らの死を見据えることで生の輝きを描きだそうとするのである。死者との交信を探し求めて樺太まで旅した賢治は、そこでひとつの認識にいたる。

《みんなむかしからのきやうだいなのだからけつしてひとり
をいのつてはいけない》（「青森挽歌」）

初期形第三次稿では、「セロのやうな声」がジョバンニに向かつて「けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほ

んたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる」と語る部分があるが、死者との交信を科学的に証明できない賢治は、「ほんたうのさいはひ」を求め、「まことの道」にたどりつく最善の方法を必死になつて模索するのである。大正一五年記された「農民芸術概論」（「農民芸術概論」「農民芸術概論綱要」「農民芸術の興隆」）で賢治は自らの進むべき道について述べている。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに
応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道で

ある（「農民芸術概論綱要」）

賢治は、「世界がぜんたい幸福」になることで生死をめぐる「修羅」の世界を超えていこうとする。梅原猛氏は「人間は物理的・化学的な物質でもなく、人格でもない。人間は、自然の大生命のあらわれのひとつにすぎない。人間の意識といえども、自然の大生命の自己意識にすぎない」¹⁵と述べ、賢治の宇宙的・生命の流れを指摘する。賢治は「ほんたうのさいはひ」を求めて「幻想第四次

の銀河鉄道」を描いた。賢治は「ほうたうのさいはひ」への祈りが『銀河鉄道の夜』を読む人々の心に届くことを信じて書き続けたに違いない。「銀河鉄道」は昼と夜をわけ「桔梗色」の空をかけめぐるのである。賢治の『銀河鉄道の夜』は、生と死のコントラストを見事に描き出した作品である。

高橋敏夫氏は、「宮沢賢治のテキストに直面すると、テキスト以外のものが消失してしまう。ひとつひとつの言葉とその関係が出現させる奇異な世界に、すっかり心を奪われてしまう」¹⁶と指摘するが、賢治の命の根源に遡って働く宇宙意志に圧倒されて、作品の言語表現を考察することに脱力してしまう。賢治の言葉に酔って、語りの問題とか、プロットとメタプロットの関係とか、言葉の仕組みとか、細々としたことを論うのは無粋のようにも思えてくる。しかし、だからこそ、賢治の言葉の魔力に酔わされることなく、文学教材として取り上げるには、授業者としての高い技術が必要とされる。

田中実氏は、読みの《動的課程》とは「読み手が自身に現象した〈ことばの仕組み〉を辿ることであり、それによつて読み手の（いのち）が蘇生される」¹⁷ことであると指摘する。生命の蘇生とは賢治が自身の作品で繰り返し描いてきたことである。賢治は『銀河鉄道の夜』のなかでも生命の蘇生を宇宙意志として描いた。文学教材として『銀河鉄道の夜』を取りあげる意味は、賢治の宇宙意志がどう描かれているかを学習者が言語表現からたどり、自己

発見に繋げることであり、授業者は学習者とともに、読みの〈動的課程〉を持続させることが重要である。

註

- 1 河合隼雄「コンストレーション」『物語と人間の科学』岩波書店、一九九三年七月を改題再編集した『こころの最終講義』新潮文庫所収、二二〇三年六月、一七頁。
- 2 河合隼雄、同掲書、五〇頁。
- 3 須貝千里「〈ことば〉は伝わらない」問題を越えられるか——『オツベルと象』の謎——田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編1年』教育出版、二〇〇一年六月、二九頁。須貝氏は、「作品とは読み手にとって〈わたしのなかの他者〉であり、それが〈本文〉の成立ということである。しかし、作品は〈本文〉を超えていると言わざるをえない。だからといって、読み手の目の前にある印刷物としての〈元の文章〉が作品そのものではない。読まなければ作品は現れないから」と述べ、「国語教育の分野における〈読み〉の正解到達主義とその批判という二元的な構図を超えて」いくことに文学教材の力があると指摘する。同三〇頁。
- 4 牛山恵「宮沢賢治童話の教材史——文学作品と小学校「国語」教科書との関連——『国語教科書研究の方法』全国国語教育学会・公開講座ブックレット②二〇一二年二月、四七頁。
- 5 牛山恵氏は「賢治童話が初めて国語教材として取り上げられたのは、戦後教育の出発点においてのことだった。すなわち石森延男のリードによって成立した暫定教科書において、賢治童話は、国家主義的な徳目あるいは教訓から解放された純粹の児童文学として、さらに言うなら民主主義の時代の新しい教材として国語教科書の上に登場した」と述べ、小学校、中学校、高等学校の国語教科書に登場する賢治童話の価値について問題提起している。同掲書、五〇・五一頁。
- 6 村瀬学「「知る」「こと」と「信じること」『銀河鉄道の夜』とは何か」新装版大和書房、一九九四年一月、二〇頁。
- 7 入沢康夫氏は、この草稿の再検討について堀尾氏が別な報告文で「九月二二日の午後二時から夜十二時まで、つまり十時間をかけておこなわれた。そして、その結果、二十箇所近いそれまでの誤読箇所が発見され、訂正されるとともに、それまでは五番目の「天気輪の柱」の章に挿入して本文化してきた五枚の原稿がそこから取り除けられて巻末に移され、元あった箇所には「(この間原稿五枚なし)」という注記が入れられることになった」と指摘している。『銀河鉄道の夜』の《草稿》と《刊本》『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、一九九六年六月、一一頁。
- 8 千葉一幹『銀河鉄道の夜』しあわせさがし』みすず書房

- 二〇〇五年七月、四八頁。
- 9 上田哲『『銀河鉄道の夜』—賢治の異空間体験—』萬田務・伊藤眞一郎編『作品論 宮沢賢治』双文社出版、一九八四年七月、二六〇頁。
- 10 入沢康夫『『銀河鉄道の夜』の《草稿》と《刊本》』『国文学解釈と教材の研究』学燈社、一九九六年六月、一八頁。入沢氏は「諸刊本（特に全集）」における「銀河鉄道の夜」における本文の詳細な比較検討は、これまで誰も正面切って取り組んでいる様子がないが、この作品の「享受」の歴史という意味で、時代時代の評価や批判と絡めながら、ていねいに跡づけていくならば、相当に興味深い結果がもたらされるのではないかと思う。そして、これは「ひやっとしたら」というので書くのだけでも、作品草稿に関していまだに残っているいくつかの問題の解決のためのヒントがそこから出てきはいいか、という気さえする」と述べている。同頁。
- 11 村瀬学『『銀河鉄道の夜』とは何か』前掲書、一一六頁。
- 12 草下英明『宮澤賢治研究叢書 宮澤賢治と星』學藝書林一九七五年七月、六〇頁。
- 13 小沢俊郎『宮沢賢治論集』有精堂一九八七年三月、二二二頁。
- 14 河合隼雄「過透明なかなしみ」『銀河鉄道の夜』角川文庫一九九六年五月、二四三頁。
- 15 梅原猛「修羅の世界を超えて」『地獄の思想』中央公論社一九六七年六月、一九九頁。
- 16 高橋敏夫「浮遊感と文学の力はつながるか」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編1年』教育出版、二〇〇一年六月、四〇頁。
- 17 田中実「（いのち）の扉」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編1年』教育出版、二〇〇一年六月、二三九頁。

※宮沢賢治の本文は、『新校本 宮澤賢治全集』第二巻・第十巻・第十一巻、筑摩書房、一九九五年七月・一九九五年九月・一九九六年一月に拠った。

**A study on Japanese language art
education
—A verbal expression of “Night on the
Galactic Railroad”
by Kenji MIYAZAWA—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of
Human Development, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi 807-8586,
Japan

No English abstract